

近現代日本政治と

読売新聞

ジャーナリズムの使命を問い直す

高橋義雄

Takahashi Yoshio

近現代日本政治と 読売新聞

ジャーナリズムの使命を問い直す

高橋義雄

Takahashi Yoshio

明石書店

著者紹介

高橋義雄 (たかはし・よしお)

1934年群馬県生まれ。中央大学法学部を卒業後、製薬会社勤務を経て、1994年より経営コンサルタント。著作に「今先指① 財務諸表と経営者の責任」(1995～98年)、「金融危機を救う者 企業決算10話」(1999～2000年)、「日英の落差 特殊法人の財務分析 (31法人の分析)」(01～07年)、「水の公団 (愛知用水誕生の話) 道に迷う道路建設」(07～08年)、「川の話 (ハッ場ダム着工遅延の謎) 鉄の話」(09～10年)、「今先指② 「紙」の話」(10～13年) (以上、すべて『労働と経済』に連載)。

近現代日本政治と読売新聞 ——ジャーナリズムの使命を問い直す

2014年10月21日 初版第1刷発行

著 者 高 橋 義 雄

発行者 石 井 昭 男

発行所 株式会社 明石書店

〒101-0021 東京都千代田区外神田 6-9-5

電 話 03 (5818) 1171

F A X 03 (5818) 1174

振 替 00100-7-24505

<http://www.akashi.co.jp>

装 幀 明石書店デザイン室

印刷所 株式会社文化カラー印刷

製本所 本間製本株式会社

(定価はカバーに表示してあります)

ISBN978-4-7503-4089-0

JCOPY (社) 出版者著作権管理機構 委託出版物)

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつと事前に、(社) 出版者著作権管理機構 (電話 03-3513-6969、FAX 03-3513-6979、e-mail: info@jcopy.or.jp) の許諾を得てください。

近現代日本政治と読売新聞 ◆ 目次

まえがき ————— 3

序 章 なぜ読売新聞か

新聞の時代は終わったか ————— 11

「カミ数」の呪縛／異質な読売の元日記事

恐ろしい「紙」の力 ————— 21

「紙」の力の行使／読売新聞の「ある目的」

第一章 読売新聞社その来歴

正力輪 ————— 30

虎ノ門事件／「正力の読売」の誕生

読売新聞社の歴代のオーナー —————

創業期の読売新聞／創業期から正力期へ

第二章

江華島事件から日本海海戦まで

——創業期の報道(1)

創刊号での宣言 ————— 46

創業期の報道 ————— 47

庶民に訴える報道を目指す／日中戦争への序章

閔妃暗殺事件 ————— 54

「征韓論」の真実／「鮮満の地」を求めて

ロシアの南下政策 ————— 61

日露戦争への道／報道規制への抵抗

陸軍による報道規制 ————— 68

陸軍暴走への助走／戦死者の日記連載

旅順戦 ————— 74

二人の司令官／旅順陥落

日本海海戦 ————— 81

バルチック艦隊壊滅／日露講和の模索

第三章

日露戦争の勝利から軍閥政治へ

——創業期の報道(2)

河野広中のこと—— 88

国民大会の開催／民主政治への希求

日比谷焼打事件—— 94

政府対応のまずさ／一気に全国に広がる暴動／歯止めを失った軍閥政治の暴走

軍部大臣現役武官制—— 103

短命内閣の要因／山県有朋の狙い

軍事費と国債発行—— 111

増大する軍事費／二・二六事件発生

尼港事件 その1—— 118

無謀なシベリア出兵／冷やかな新聞報道への怒り

尼港事件 その2—— 126

ロシア社会主義革命への干渉／シベリア出兵の背景／パルチザンの攻勢

山県有朋と桂太郎—— 134

軍閥政治の中心となるまで／二人の結束

元老による政治 ————— 140

「尊王攘夷」というキャッチフレーズ／西園寺公望の登場

第四章

正力松太郎の読売へ

正力社長の初出社 ————— 148

経営刷新に着手／ラジオ放送を巧みに利用／イベント開催で部数増

国宝展と近衛文麿 ————— 156

贈賄幫助で起訴／近衛文麿との出会い／名宝展の成功

「空白の歴史」 ————— 161

教えられなかった戦時史／「柳条湖事件」報道の比較

近衛文麿を取り巻く人々 ————— 172

華族出身の三人の京大学徒

軍閥内閣への突入 ————— 177

近衛文麿首相待望論／日中戦争下の内閣

第五章

太平洋戦争突入へ

東条英機と岸信介の出会い ————— 181

陸相候補に急浮上／石原莞爾との対立／大政翼賛会の発足

岸信介と東条英機の連携 ————— 192

岸の思惑／文書による討議

東条内閣の誕生 ————— 198

不調に終わった「荻外荘会議」／岸・木戸・東条共同体

内閣と統帥部の「連絡会議」 ————— 204

長州閥による政権維持構想／戦争突入四二日前のやりとり

企画院総裁・鈴木貞一のこと ————— 210

岸と鈴木という盟友／無視された「早期講和」

ミッドウエー出撃命令の謎 ————— 216

政治家・岸信介の誕生／極秘とされた海戦大敗／軍需省の発足

第六章

敗戦、そして「大連立構想」の崩壊まで

獄中日記に書き写された英文「罪と罰」—— 226

岸釈放の謎／日記と断想録

正力松太郎の政治活動—— 233

正力の初入閣／ビキニ水爆実験報道のスクープ

正力の「原子力平和利用」—— 239

「ついに太陽をとらえた」／着々と進む原子力平和利用への道

岸首相と正力国務相—— 246

警職法改定と安保闘争／タイム誌への反論

読売グループ統御の手法—— 252

政治記者としての渡辺恒雄／読売新聞グループ本社議決権行使の仕組み

「大連立構想」の崩壊—— 259

二〇〇七年十一月七日の読売新聞記事の異変

「政治とカネ」のキャンペーン—— 267

執拗な報道／「大連立構想」への拘泥

正力輪の呪縛

273

渡辺恒雄の足跡／終わらない戦争／読売への期待を込めて

あこがき

285

近現代日本政治と 読売新聞

ジャーナリズムの使命を問い直す

高橋義雄

Takahashi Yoshio

明
石
書
店

まえがき

二〇〇九年夏の総選挙で民主党が三〇八議席をとり「終戦以来初めての民意による政権交代だ」と投票した有権者は新しい時代の幕あけに湧いた。ところがわずか三年という短期間で元の自民党政治に逆戻りしてしまったのである。

なぜこれほどあっけなく民意が急変したのだろうか。

民主党は総選挙に大勝したことへの驕りと政権運営の未熟さが露呈したとの非難を浴びたが、果たしてそれだけが失政の原因であろうか。

長いこと読売新聞を愛読してきた筆者はまったく別のところに真因があったのではないかという疑念を持った。それは読売新聞の周到に計画された一連の報道によってもたらされた結果ではないか、という疑念であった。これは仮説であって、真相を確かめるには立証しなければならない。本書はこの仮説の立証を目的として書かれている。

疑念の発端は二〇〇七年一〇月末から十一月七日にかけての自民党・福田康夫と民主党・小沢一郎党首による大連立を読売新聞渡辺恒雄主筆が仲介し、失敗に終わったときの報道に遡る。

渡辺主筆の連立構想は中曽根康弘内閣時代の一九八三年に始まった長年の宿望であり、福田・小沢

両党首の合議にまで達していた連立工作が民主党の党議によって拒否され土壇場で雲散霧消した。このときの小沢党首の党内統御への不首尾に仲介者渡辺主筆は業を煮やし「小沢憎し」の思いは頂点に達した……と読売の紙面から読み取れた。

以来、読売は「政治とカネ」をキーワードとして徹底した小沢攻撃を開始した。追い込まれた小沢党首は新代表を鳩山由紀夫に託して、自らは代表代行として来るべき〇九年の総選挙工作に専念した。その結果、前記のように民主党が圧勝し政権交代が実現、鳩山内閣が発足したことで「最大の功労者」として小沢選挙担当代行は胸を張った。読売もその姿を第一面に掲載せざるを得なかっただけに大連立を反故にされた時のことが思い起こされた。

二〇一〇年一月一日、政権交代後はじめての元日を迎えたとき、読売以外の日刊各紙はこぞって新政権による新しい時代への新春の門出に惜しみなく声援を送る記事を書いた。ところが読売は、元日の新聞の第一面トップに大きな見出しで小沢への宣戦布告ともいえる記事を掲載した。そして、この日を境に「政治とカネ」キャンペーンをさらに拡大して発足したばかりの新政権をこの切り口から突き崩す攻勢を強めていった。

右の仮説を立証するために、「政治とカネ」関連記事を内容別に分類し、その掲載頻度を集計したが（第六章）、その前提として読売新聞の創刊号（二八七四年一月二日）から今日までの記事を丹念に読み、明治・大正・昭和・平成の時代の流れの中で読売がどのような報道姿勢を貫いてきたかの検証に努めた。

一例を示せば、岸信介内閣における第七代読売社長であった正力松太郎原子力担当相の果たした役

割と同じ光景を安倍晋三内閣を支持して原子力発電再稼働や憲法第九条、第九六条の改正を提言する渡辺恒雄読売グループ会長の勇姿を目のあたりに見るとき、正力社主の呪縛のような力がそこに強く働いているような思いにとらわれる。

結果として立証できたかどうかは読者の判定に任せるしかないが、書き終えて願うことは、読売が創刊号に立ち返って読者のための「紙」に戻ってほしいと切望するものだ。

二〇一四年九月

高橋義雄

近現代日本政治と読売新聞 ◆ 目次

まえがき ————— 3

序 章 なぜ読売新聞か

新聞の時代は終わったか ————— 11

「カミ数」の呪縛／異質な読売の元日記事

恐ろしい「紙」の力 ————— 21

「紙」の力の行使／読売新聞の「ある目的」

第一章 読売新聞社その来歴

正力輪 ————— 30

虎ノ門事件／「正力の読売」の誕生

読売新聞社の歴代のオーナー —————

創業期の読売新聞／創業期から正力期へ

第二章

江華島事件から日本海海戦まで

——創業期の報道(1)

創刊号での宣言 ————— 46

創業期の報道 ————— 47

庶民に訴える報道を目指す／日中戦争への序章

閔妃暗殺事件 ————— 54

「征韓論」の真実／「鮮満の地」を求めて

ロシアの南下政策 ————— 61

日露戦争への道／報道規制への抵抗

陸軍による報道規制 ————— 68

陸軍暴走への助走／戦死者の日記連載

旅順戦 ————— 74

二人の司令官／旅順陥落

日本海海戦 ————— 81

バルチック艦隊壊滅／日露講和の模索